行動経済学会　第 6 回大会(2012)報告

宗教、道徳と経済行動：　日本における歴史的起源

Religions, Ethics and Economic Behavior: Historical Origins in Japan

山口勝業

1.　問題の所在と本稿の目的

宗教および信仰にもとづく道徳観は人々の経済行動にどのような影響を与えるか？これはマックス・ウェーバー以来の古典的な問いであり、現代でもなお問われ続けられるべき問題である。本稿では行動経済学への含意を意識しつつ、この問題をあらためて考察してみたい。

宗教と経済行動の関係はとりわけ日本に関しては一種のパズルである。なぜならば神道・仏教・キリスト教などが混在する日本社会では、そもそも宗教が経済活動となんらかの意味のある関係があるのかどうかが疑問視されるからである。けっしてプロテスタントが主流ではない日本でも近代資本主義が一定の成功を収めたのは、ウェーバー説への反証となるだろうか？

19 世紀末に新渡戸稲造が『武士道』を英文で著す動機となった逸話がある。ベルギーの法学者ド・ラブレーが「日本では宗教にもとづく道徳教育はどうしているのか」と尋ねたとき、新渡戸が「ありません」と答えると、驚いたド・ラブレーは「宗教なし！どうして道徳教育を授けるのですか」と訝った。これが一つのきっかけ[1]　となって新渡戸は、日本では宗教のかわりに武士道が道徳教育の基盤だ、という説を展開した。新渡戸の武士道論に筆者は同意しないが、ここでは論及しない。

ただし、この逸話にある三つのキーワード、「宗教」・「道徳」・「教育」は以下での考察において重要な概念となることを指摘しておきたい。

2.　概念の定義と分析枠組み

宗教や道徳に踏み込むと深遠な哲学論議になりがちであるが、ここでは以下のように簡潔に定義しておく。宗教とは、人間と超人間的存在（神・仏・精霊など）との関係について人々の間に共有されている信念である。その信念を普及し共有するために体系的に言語で記述されたものが聖典（聖書・経典など）で、その教義を一般の信者に対して解説する専門的職業人として聖職者（司祭・牧師・僧・神官など）がいる。ただし聖典と聖職者は宗教にとって不可欠というわけではない。[2]

あらゆる宗教に共通している特徴は、生と死に関する観念である。死後の世界に関して天国と地獄（キリスト教）や因果応報の輪廻（仏教）の観念が、現世をどう生きるべきかに関する規律を生む。それを大別すると、死後の世界で極楽往生を遂げようという来世志向と、生きているうちにご利益を受けようという現世志向という二つのベクトルがあり、実際の規律はこれらの複合形となる。

一方、道徳とは人間と人間との関係を維持するための望ましい行動について人々の間に共有されている規範である。この規範は体系的に記述されるよりも、むしろ暗黙知として人々が体得して共有するものである。成人に至るまでの子供の教育の過程で、親や先生や周囲の大人が言葉や行動で教育・指導する際に宗教上の教義が引用・参照されれば、宗教と道徳の接点が生れる。

ただし、宗教と道徳との矛盾は帰属する集団が異なる場合には顕在化することがある。同じ宗教集団の成員に対して維持される道徳は異教徒に対しては適用されないので、異教徒に対する弾圧や殺戮、同一宗教の間でも宗派間の争いは後を絶たない。

経済行動は、マクロ的にもミクロ的にも、希少な資源をいかに配分するかという選択行動の問題に帰着する。人間の幸福（効用や厚生）は、他人の幸福にも依存している面と、一方で他人の不幸を犠牲にして得られる面とがある。経済行動での道徳は、資源配分における利己主義と利他主義の二つのベクトルをどう折り合わせるかの規範である。アダム・スミスが『国富論』で利己主義を、『道徳感情論』で利他主義を論じたときに、経済学と道徳は双子の兄弟として生れ落ちた。

ここで道徳は英語では“ethics”または“morals”という単語であるが、日本語では「道」と「徳」の漢字二字の熟語であることに注目しよう。「あの人は徳が高い」というように「徳」は個人に備わっている

1　もう一つのきっかけは、新渡戸の妻は外国人で妻にも家庭内で説明する必要があったからである。

2　民俗信仰では多くの場合、聖典や聖職者がなくても宗教として機能している。

資質を指すのに対して、「あの人は商人(あきんど)の道を心得ている」とか「その行為は武士道に則っている」という場合には、「道」は商人や武士が一般に持つべき共通の行動規範が顕在化された立ち居振る舞いを指す。[3] 徳は個人に備わる資質、道は行動の社会的規範、この二つを融合したのが「道徳」である。[4]

なお日常用語で「道徳」とほぼ同義に使われる「倫理」は対人関係での態度や行動規範をいう。(倫に"人偏"ついていることに注目) 「道」がより広い社会規範、「徳」がパーソナリティなので、「倫理」はその中間に位置づけられる。つまり社会と個人との関係のなかで範囲の広さは、道＞倫理＞徳という順序になっている。

以上の議論を整理すると、宗教には来世志向と現世志向の軸、道徳には利己主義と利他主義の軸があり、ある経済行動は二つの軸で分類された四つの象限(ウェーバー的表現では"理念型")のどこに位置づけられるか、という分析ができる。**【図表1】** 例えば、「恵まれない人々に寄付をする善行を積めば(利他主義)、死んだ後に極楽に行けるはずだ(来世志向)」というのは第Ⅳ象限に属するストーリーである。

3. ウェーバー学説の再検討

マックス・ウェーバーの壮大な研究を貫く問題意識は「近代資本主義はなぜ、どのように生れてきたか？」であり、歴史的な比較分析をつうじて「なぜ西欧だけにそれが成立したのか？」を明らかにすることであった。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』では、「資本主義の精神」を「倫理的な色彩をもつ生活の原則」とし、この精神が資本家や企業経営者だけでなく熟練労働者や技術的・商業的訓練を受けた従業者にも広く共有されたことによって、近代資本主義が西欧の一部から発達した、と論じている。このように社会的に共有された倫理観や生活態度をウェーバーは「エートス」と呼んだが、これは日本語の「道」に近い概念である。

このようなエートスの起源は、ルターやカルヴァンの宗教改革から発生したプロテスタンティズムに求められ、その後に清教徒によって強められた。宗教改革がもたらしたものは、「カトリック教徒の見解とは対照的に、世俗内の職業として編制された労働に対して道徳的重視の度合いや宗教的褒賞をいちじるしく強めた」ことにあった。神に仕えるためには、カトリック修道士のように隠遁して禁欲生活で修業を積むのではなく、日常生活のなかで世俗的義務である各人の職業を禁欲的に行うことによって達成される、という職業倫理が生まれたのである。ウェーバーはその典型としてベンジャミン・フランクリンが自伝に記した生き方を例示している。

聖書をドイツ語に訳したルターは、「職業」を意味する単語に「ベルーフ」(Beruf)をあてた。この言葉には「神から与えられた使命」、「天職」という観念が込められている。世俗内禁欲とは各人が天職に専念することで、資本主義的な営利活動の結果として富が得られれば、それは神の意志にかなうものである、とプロテスタントは考える。

当時(19 世紀末)の西欧の職業統計によれば、資本主義的経済活動に従事している企業家や熟練労働者はプロテスタントが多いという事実をウェーバーは指摘する。またカトリックの家庭に比較して、プロテスタントの家庭では子供を高等教育機関に進学させる際に、近代的な技術を習得させたり商工業に従事する準備をさせたりする実業高等学校を選択する傾向が強くみられた。

このように宗教は直接に職業倫理を形成するのではなく、教育を媒介として達成されることはデュルケムも『道徳教育論』で説いている。ウェーバーは「あたかも労働が絶対的な自己目的――Beruf「天職」――であるかのように励むという心情」は、「決して、人間が生まれつきもっているものではない。(中略)むしろ、長年月の教育の結果としてはじめて生まれてくるものなのだ。」と述べている。資本主義はそれ自身を維持・発展させるために必要となるエートスを、教育をつうじて人々に植え付ける。そうした生活態度や職業観念は近代資本主義の発生に先立って「個々人の中にばらばらにではなく、人間の集団によって抱かれた物の見方として成立していなければならない」

このように一般に「エートス」は人々が集団として共有している社会意識であり、なかでも「資本主

---

[3] 経済行動ではないが、芸術における茶道や華道、スポーツの剣道や柔道でも「道」は精神が立ち居振る舞いに現れた状態を示す。

[4] 道徳の考察は、丸山真男(1952)による伊藤仁斎と荻生徂徠の思想に関する論考に負うところが多い。

義の精神」は近代の西欧のプロテスタントの人々のあいだで醸成された禁欲的職業倫理と生活態度という歴史的・地理的に特殊なエートスである、というのがウェーバー説である。だが、決してプロテスタントが主流とはいえない日本でも資本主義が定着してきたのは、なぜだろうか？プロテスタントに限らず、宗教活動は経済行動に何らかのポジティブな影響を与えるのだろうか？

4. 世界価値観調査に見る日本の特殊性

経済学における宗教と経済成長に関する最近の研究事例として Barro and McCleary（2003）がある。彼らは 1981 年から 1999 年にかけて行われた6回の国際世論調査を利用して、41 か国について「宗教は経済成長に影響を及ぼすか？」という観点から統計的分析を行った。対象となった国々の宗教は、キリスト教、イスラム教、仏教、その他多岐にわたっている。

彼らの結論を要約しよう。（1）宗教的信念（天国や地獄、死後の世界、神の存在などを信じる）が強い国ほど経済成長率は高い。その一方、（2）人々が教会や寺院の礼拝に頻繁に（少なくとも月 1 回）参加する国ほど経済成長率は低い、という傾向が観察された。（1）は個々人の信念(believing)のあり方であるのに対して、（2）は教団組織への帰属の強さ(belonging)である。経済成長率は belonging に対する believing の相対的な強さに影響される、と彼らは結論づけている。[5]

この結果について彼らは、（1）経済活動のパフォーマンスを高めるような個人の資質は、宗教的信念に影響されて形成される。（2）人々が頻繁に教会や寺院に参拝すると、それだけ時間や労力が経済活動以外に（つまり宗教活動に）費やされるからだ、という解釈を示している。

ところで、彼らが利用した世界価値観調査のデータで、宗教に関する2つの質問に対する回答を日本人と外国人で比較すると顕著な差が見られる。第1の質問は「あなた自身は信心深いですか？」と個々人の信念(believing)を尋ねている。「信心深い」と回答した人が外国人は全体の 70％以上いるが、日本人は約 24％にすぎない。反対に「信心深くない」という回答は、日本人 62％対外国人 25％である。世界中の人々の平均に比べて日本人は著しく信仰心が薄い。**【図表2】**

第 2 の質問は「結婚式や葬儀などの機会を除いて、どれくらい頻繁に宗教的行事に参加しますか？」で、宗教組織への帰属の強さ(belonging)を尋ねている。これに対する日本人の回答では、「宗教上の祝祭日」（42％）と「年 1 回」（22％）の二つが外国人よりも圧倒的に高い。**【図表3】**

これらを総合すると、「日本人は信心深くないのに、少なくとも年 1 回または宗教上の祝祭日にほぼ必ず宗教行事に参加する」という特性がある。[6] これは多くの外国人には奇妙に映るかもしれないが、我々日本人にとって違和感はない。日本人の多くは特定の宗教にコミットせず（葬式は仏教、結婚式はキリスト教）時と場合によって使い分け、正月には神社やお寺に初詣、春と秋のお彼岸には墓参り…と、宗教行事には定期的に参加するのが慣例だからだ。

5. 日本人の宗教、道徳と経済行動の歴史的起源

このような宗教に関する日本人の特異性と、それにもとづくエートスには歴史的な背景がある。もともと原始宗教を起源とする神道があった我が国には、6世紀中葉に仏教が、その後儒教が中国から伝来し、15 世紀には西欧からキリスト教（カトリック）がもたらされた。戦国時代まではこれら複数の異なる宗教は地方の政治権力と結びついて並存していた。（例えばキリシタン大名）

信長・秀吉から天下統一を継承した徳川政権は、自らの権力基盤を維持するために宗教を寺社奉行という官僚システムの支配下においた。キリシタン弾圧だけでなく、仏教に対してもその勢力を抑圧したのは、家康自らが一向一揆の鎮圧に手を焼いた苦い経験があったからだ、といわれる。

---

[5] この研究の問題点は、彼らの調査対象が 20 世紀末の約 20 年間という比較的短い時期である点。この期間に各国間で観測された経済成長率（被説明変数）の違いは、宗教的慣習（説明変数）の違いに起因するというよりも、その時代の各国の経済環境や産業の競争力によって生じたと解釈すべきだろう。宗教と経済成長の関係を考察するには、時間軸の尺度は年単位ではなく世紀単位に設定すべきだろう。宗教や信仰心が人々の生活態度を形成し、何世代にもわたって持続的な影響を経済成長率に与えるには、それだけの時間がかかるはずだからだ。

[6] Barro らの結論に照らせば、このような国民性を持つ日本の経済成長率は低いはずであるが、計測期間の 1981 年から 1999 年では日本経済はバブルとその崩壊を経験しており、宗教と経済成長との理論上の推定からは明らかに逸脱している。

統治の哲学として徳川幕府がトップダウンで採用した儒教（朱子学）は、忠孝の精神で社会秩序を維持する価値観を奨励した。中国ではほんらい宗教でもあった儒教はここに宗教色を一掃され、「道徳」の教義として武士だけでなく庶民にも広く浸透していった。こうして我が国は国家レベルでは著しく無宗教的になったが、一方では徳川政権は家康を日光東照宮に祭って神格化した。[7]

それに先駆けて庶民のあいだでは仏教信仰にもとづく勤労観が根付いていた。士農工商の身分制は徳川政権の支配的イデオロギーにすぎない。庶民のあいだでは士農工商は職分としては同等で[8]、それぞれの職分に精励する職業倫理が信仰に裏付けられて共有されていた。

例えば、浄土真宗は「西欧のプロテスタンティズムに最も類似性をもっていて、その倫理が、プロテスタントの倫理に最もよく似ている」とベラーは指摘している。具体例は浄土真宗の信者が多かった**近江商人**で、彼らは近江の国を本拠地に全国各地を行商してビジネスを展開した。ある近江商人の伝記の一節には、「身を始末・倹約し、ただ正直を本として、堪へがたき苦労を厭わずに稼ぎ働き、…（中略）…片時も家業を怠るべからず」[9]とある。

親鸞(1173-1262)を開祖とする浄土真宗の中興の祖、蓮如(1415-99)は、苦行や瞑想による仏行の効果を否定し、信者に対しては、日常生活では儒教的な徳行を実践しつつ、内面の生活では阿弥陀仏にひたすら頼るべし、と説いた。我々が生きているのは阿弥陀如来のおかげなので、その慈悲に感謝して恩に報いるには、現世において自己の職業に勤勉に励み、倫理的行為を実践することである、と。まさにウェーバーの描いた宗教と職業倫理の仏教バージョンである。

仏教では貪欲は基本的な罪であるが、商人や職人の経済活動から得られる利益に対して、真宗では「自利＝利他」の教義にもとづいてこれを正当化した。商業や工業はいずれも顧客＝需要者の利便のために、つまり他利のためになっているからである。他者に利便を提供して自分も利益を得ることを「自利利他円満の功徳」という。利他心は菩提心であり、これを発して世の中の人々を救済することを菩提行という。商工業で成功する秘訣は、菩提行によって信用を得ることである。[10]

また三河出身の武士であった鈴木正三（1579－1655）は関ヶ原の合戦、大坂冬の陣・夏の陣で家康軍に加わって活躍したが、元和 6 年（1618）、42 歳で出家して曹洞宗の禅僧となった。彼は禅宗にもかかわらず庶民に念仏をすすめ、世俗の職業に励むことが即ち仏道修行である、と説いた。

土着宗教においても信仰にもとづく通俗道徳が生活態度を律する事例には、元禄期に起源を持ち江戸時代後期にまで江戸と関東近辺の庶民に大流行した富士講がある。富士講は富士山を霊峰として信仰し、その頂上に極楽浄土があるとして信者たちは「講」を組んで富士登山の修行を行った。日常生活では、勤勉・倹約・倹約・正直・善行・孝行などの通俗道徳をそれぞれの家職において実践すれば、末の世は神の加護によって倖せを得るはずだ、と信ずる宗教であった。「これら多くの人々が通俗道徳の実践にはげむことによって、一人一人がミロクの世＝理想世を日々目指した」[11]　生活態度はプロテスタンティズムの倫理ときわめて近いといえる。

体系的な教義や教団に依拠せず、職業集団がそれぞれの信仰対象を持っていたことは江戸時代の株仲間の特徴である。宮本又次は、信仰対象を共有することで株仲間の結束を強める意図があった、と指摘している。商売の本質は営利にあるので、それぞれの成員が私利私欲に走り、抜け駆けで儲けようという動機がつねに働く。これを統制して株仲間として規律づけるために、共通の神仏を崇拝して「経済原則を超越した扇眼（かなめ）を持ち来さなければ纏まりがつかなかった。（中略）神愛にもとづく仲間愛があるゆえに、各成員の仲間全体に向かっての方向づけは、なんらの強制もなき、自発的なものとなったと考えられる。」[12]

ここで興味深いのは、多様な神様の存在と株仲間が必ずしも一対一の関係になく、住吉神社や天満天神のように複数の株仲間の信仰を集めていることである。また、人と人とのつながりである株仲間が自らの意思によって信仰の対象を選択している、という点である。これが西欧の一神教との

7　明治維新で大政奉還がなされると今度は天皇が「現人神」となって神格化された。

8　「百姓」はもともとあらゆる職業を意味していたが、江戸時代からは農民を意味するようになった。

9　『神崎郡誌稿』448　（ベラーp.239）

10　『幻々要集』298。内藤莞爾『宗教と経済倫理―浄土真宗と近江商人―』p.285

11　布川 p.282

12　宮本、p.103

大きな違いで、日本ではまず人々の結束した集団（株仲間）があり、それが神様を担ぐという構図になっている。神輿を担ぐという儀式は、まさしく象徴的である。

商人の間での職業倫理を教義として体系化したのは、石田梅岩（1685-1744）を開祖とする石門心学である。梅岩は京都近郊の農家に生まれ、商家での丁稚奉公を経て独学で神道や儒学を学び、これらを混淆した独特の哲学的世界観にもとづいて勤勉・倹約の職業倫理を説いた。その教義を継いだ中沢道二、布施松翁、柴田鳩翁ら弟子たちは石門心学を全国に普及させ、信奉者は商人だけでなく農民や職人、さらには武士の一部にまで広がっていった。

石門心学が主に成人教育を目的としていたのに対して、庶民にとって初等教育の場は寺子屋であった。そこでは読み・書き・算盤を基礎に一般に「往来物」と称される実用書が職業知識を習得するテキストとして普及した。一方、儒学に基礎をおく道徳教育も重視され、難解な四書五経をやさしく解説した『経典余師』が代表的なテキストであった。江戸時代の庶民は、寺子屋教育をつうじて将来職業に就いて必要となる技術的・知的訓練とともに職業道徳も学んだのである。

6. 結論： 直列構造と並列構造

欧米のキリスト教的な発想では、ド・ラブレーの発言やウェーバーの論述に見られるように、宗教⇒道徳⇒教育が一貫性をもって直線的につながっている。これに対して、日本では宗教と道徳と教育は必ずしも連続的なセットではなく並列的である、という仮説を提示したい。機械を動かす動力である電池に例えれば、宗教と道徳と教育という人々の経済行動の動力源は、欧米では直列構造、日本では並列構造になっている。**【図表4】** このため宗教、道徳、教育の3つの電池のうちどれか一つがダウンしても、直ちに経済行動が破綻しないという柔構造になっているのが日本の特長ではないだろうか。逆に日本の弱点は、かりに経済行動になんらかの病理的問題が生じた場合に、その原因を特定するのが難しいかもしれない。

江戸時代には宗教と道徳が分離されるとともに、実学重視の教育に必要な職業道徳が普及し、職業集団（例えば株仲間）ではご利益を求める現世志向の強い信仰が集団秩序の維持という価値のために共有された。日本人にはミロク信仰のように来世志向もないわけではないが、どちらかといえば現世志向が強く、霊験あらたかでご利益があれば神様でも仏様でもお稲荷様でも抵抗なく信仰する。浄土真宗のように悪人も善人も阿弥陀如来にすがる「他力本願」であれば、自己責任で努力して最後の審判を待つというプロテスタンティズムでみられる人生の緊張感はうすれるだろう。

道徳に関する利己主義か利他主義かという対立軸では、儒教的な忠孝を重視したタテの関係や職業集団のヨコの結束を守るために、利他主義にもとづく経済行動のほうが「徳がある」、「道にかなっている」と見なされがちである。自分さえよければという利己主義が集団秩序を乱す態度として排撃されるのは、米作農耕のムラ社会だったからでもあろう。また日本人の集団意識にみられるウチとソトの関係、「世間」という日本独特の社会関係のなかで利己主義と利他主義がどうからみあっているのかも興味深いが、その考察は将来の研究課題としたい。

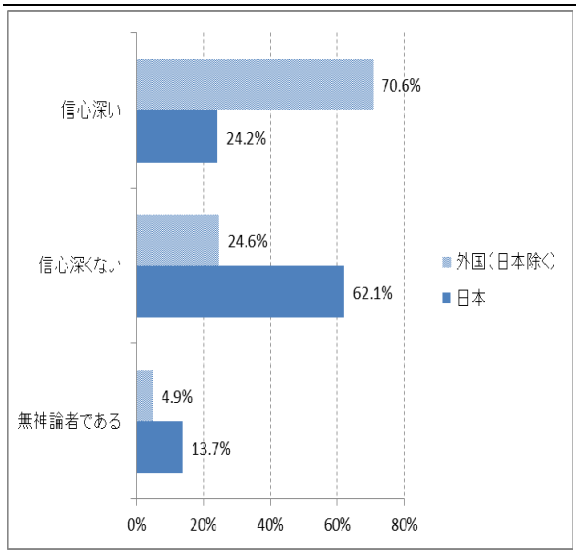
【参考文献】

ウェーバー、M.（大塚久雄訳）『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、岩波文庫、1989.
デュルケム、E.（麻生誠・山村健訳）『道徳教育論』、講談社学術文庫、2010.
ベラー、R. （池田昭訳）『徳川時代の宗教』、岩波文庫、1996.
石川謙、『石田梅岩と“都鄙問答”』、岩波新書、1968.
岩科小一郎、『富士講の歴史』、名著出版、1983.
笠原一男、『蓮如』、講談社学術文庫、1996.
神谷満雄、『鈴木正三』、PHP 文庫、2001.
堂目卓生、『アダム・スミス』、中公新書、2008.
新渡戸稲造（矢内原忠雄訳）、『武士道』、岩波文庫、1938.
布川清司、『近世町人思想史研究』、吉川弘文館、1983. p. 281-282
丸山真男、『日本政治思想史研究』、東京大学出版会、1952.
宮本又次、『株仲間の研究』、宮本又次著作集第1巻、講談社、1977.
Barro, R. J. and R.M. McCleary、 “Religion and Economic Growth“, Harvard Univiersity, Working Paper, 2003.
世界価値観調査については、http://www.worldvaluessurvey.org を参照。

【図表１】 宗教と経済道徳の分析フレームワーク

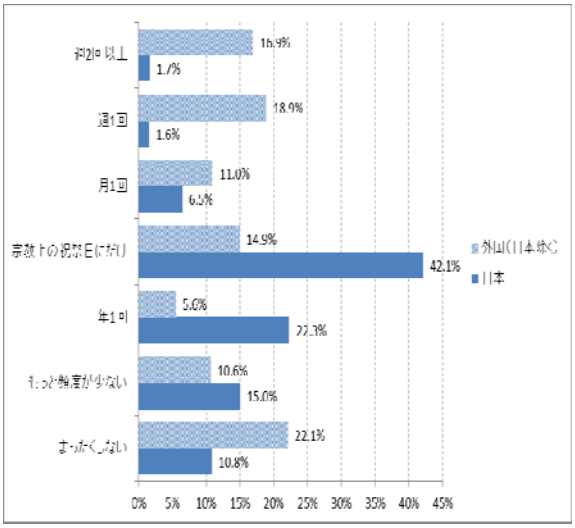
		宗教	
		現世志向	来世志向
経済道徳	利己主義	I 拝金主義者 （ウォール街の強欲資本主義者）	II フランクリン型自己努力人間 （ウェーバー的　プロテスタント）
	利他主義	III 日本的商人 （近江商人、石門心学）	IV 金持ちの慈善事業家 （ビル・ゲイツ？　W.バフェット？）

【図表２】 あなたは信心深いですか？



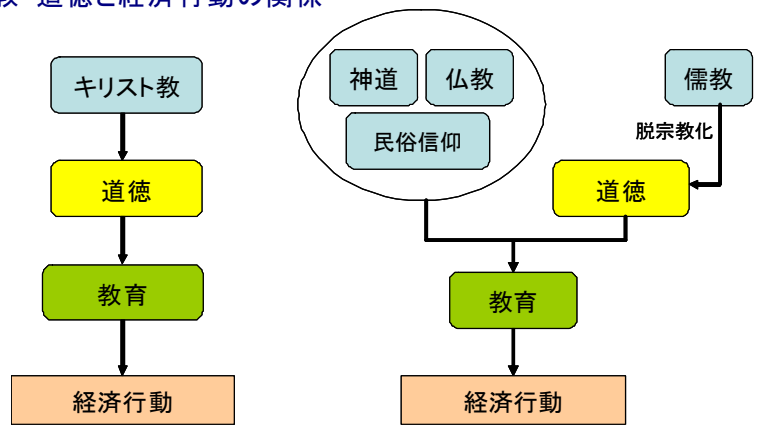
出所：World Value Survey(2005)より筆者作成

【図表３】 宗教行事への参加頻度は？



出所：図表２に同じ

【図表４】 宗教・道徳と経済行動の関係



直列構造 （欧米）　　**並列構造 （日本）**